紀　　要

第　11　号

茅野市八ヶ岳総合博物館

はじめに

茅野市では、重点施策として福祉・環境・教育を取り上げてまちづくりを展開しています。当博物館もいうまでもなく教育の一翼を担う施設であります。

地域の自然・歴史・民族・産業・文芸・未来コーナーを設け文字通り総合博物館として市民に親しまれてきています。今年度の特筆として常設展示の一部を展示替えしたことがあげられます。

館が設置されて14年間、予算の関係もあり大幅な展示替えもされずに今日に到っています。特に未来コーナーは、ロボット、パソコン、リニアモーターカー、おもちゃなどがあり子どもたちにとっては、人気のある場所でありましたが、時の経過とともに故障が目立ち修理に追われ又、日進月歩の科学の先端機器に取り替えることもできずどうしたらよいか思案していました。

そこに、郷土の「農業用水を拓いた坂本養川と昔の暮らし」が全国的に使用されている小学校社会科の教科書（3・4年生用）に取り上げられたとの情報が入りました。かつて、これほどこの地域に関わる社会事象が教科書に掲載されたことはありませんでした。

この機を大事にとらえ、子どもたちの学習の場として、これまでの未来コーナーを替えて、坂本養川コーナーを開設しました。この坂本養川コーナーが、21世紀を生きる子どもたちのみならず、多くの方々が養川の粘り強さや智恵に学び、パートナーシップのまちづくり（公民協働）に生かせたらと願うものです。

今年度も、博物館協議会、専門委員会の皆様には運営に関し貴重なご提言、ご支援をいただき、また、事業にご協力くださった博物館ボランティアの皆様、ご多用の中を講座、講演を快くお引き受けくださった先生方に対しまして厚く御礼申し上げます。

平成15年3月

茅野市八ヶ岳総合博物館
館長 小池春夫

目　　次

・農業用水を拓いた「坂本養川コーナー開設」…… (1)

・昔の人々の工夫 ～改良された機織り機～ …… 笠原　郁子 (7)

・「民衆のうた」として諏訪の地に花ひらいた俚謡の歩みについて
…… 荻原　儀久 (15)

年　　報

・平成14年度事業報告 …… (23)

・博物館協議会委員・専門委員名簿 …… (27)

・博物館 職員名簿 …… (28)

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要11:1-6(2003)

農業用水を拓いた「坂本養川コーナー」開設

1．開設の経緯

当博物館の常設の歴史展示コーナーの一角に、「拓かれる山麓」として坂本養川と汐についての展示があった。しかし、小学生の学習には資料が少なく、しかも難しい展示であったために、判り易い展示をと検討中であった。

ところが、平成14年4月より学習指導要領が改定され教科書が新しくなり、市内をはじめ全国の約半数の小学3・4年生が使用する社会課教科書（東京書籍発行）に、坂本養川により八ヶ岳山麓に開削された農業用水（汐）や昔のくらしについて約30ページにわたり取り上げられ、子どもたちの学習が始まった。

そこで、昨年7月、子どもたちの学習資料提供の場のみならず、養川汐が現在もそのまま守られ、命の水として田を潤し続けていることを多くの方々に知ってもらおうと、昨年7月、未来コーナーを取払い坂本養川コーナーを設置したものである。

2．坂本養川と汐

坂本養川は、享保21年（1736）田沢村（現・茅野市宮川田沢）の甚兵衛の長男として生まれた。養川は16歳で父の死により家を継ぎ、23歳で名主役を努めた。幼名は太郎、通称を市之丞、のち養川と称した。

八ヶ岳南麓の原山新田村（現・原村中新田）一帯は、滝之湯川や渋川など豊かな水量のある蓼科山麓に対し、山から出る水が少なく草刈り場として放置されているところが多かった。また、慶長15年（1610）にできた原山新田村の開発以後70余の新田村が次々とつくられ、生活するための田畑が必要であった。

新田が多くなるにつれて干ばつの際に凶作の広がるのを憂いた藩は、新田つぶしを命じた。田沢村の名主だった養川は藩の方針によって新田つぶしをしなくてはならなかった。せっかくつくった新田をつぶすことに心を痛めた養川は、なんとかして諏訪全群の水利の再構築をしなければと考えた。

養川は、28歳のとき近畿一帯（今の愛知県、大阪府、兵庫県）にかけて水田開発の見聞をした。のちに江戸へ出て関東7か国にわたる詳細な開拓計画をたてるが、病気のためやむなく郷里に帰り志を断念する。そののち養川は、八ヶ岳山麓の地形や川、すでにあった汐や水量をくわしく調査して、豊かな谷川の水を、水不足の台地に汐の開削によって水を引き、200町歩余り開田する計画を立て藩に願い出る。

しかし、高島藩では、財政難と家老の権力争いがあり、養川の献策はなかなか聞きい

れてもらえなかった。権力争いが決着し、養川が願い出ること6回、最初に開削された滝の湯汐ができあがるまでに13年を要した。粘り強い養川の願いが実現し、次々に汐が掘られて15本ほどの新汐ができた。

蓼科横谷峡にかかる乙女滝は養川の提案により開削された大河原汐の一部分であり、尖石縄文考古館の横を流れる滝の湯汐もまた養川汐である。

3．館内の展示案内

博物館では、坂本養川の開削した「水回し（繰り越し汐）の仕組みや模型」をはじめ、「諏訪の農業用水と坂本養川の年表」、「諏訪盆地のせぎ図」、「汐の写真」などをパネルでわかりやすく展示している。また、170インチの大型スクリーンでは、「当時の暮らし」や、「坂本養川と汐」等「水回し（繰り越し汐）」等について上映している。

◎展示内容

① 映　像（坂本養川シアター）

上映時間はいずれも3～5分。170インチの迫力ある画面。

o当時の暮らしを確かめる

oせぎと養川

o「くりこしせぎ」とはなんだろう

o北から南へ大河原せぎ

oどんな工夫でせぎはできたの

o当時のせぎは現在どうなっている

o養川のあしあと

o現在も生きているせぎ～滝ノ湯せぎ～

② パネル

イラストと説明文による

(1) 坂本養川のかつやく（・養川のおいたち　・「せぎ」を作る決心をする）

(2) こんな工夫や努力も（・等高線にそって作られた「せぎ」）

(3) 苦労した〈せぎ〉作り（・工事の様子と使われた道具）

(4) 認められた養川の仕事（・水をまわしていく「くりこしせぎ」）

③ 工事で使われた用具

4本くわ、ひらぐわ、木づち、もっこ、てんびんの展示

④ 模　型

(1) せぎ取入れ口　(2) 川を越すせぎのとい　(3) 等高線とせぎ　(4) 坂本養川翁像

⑤ 図　表

(1) 諏訪の農業用水と坂本養川の年表

次の５項目について色分けして見やすくした年表

・政藩関係　　・農業の基盤整備　　・坂本養川の履歴

・養川の対応と提案　　・農業用水関係

(2) 滝之湯せぎと大河原せぎ（航空写真へ記入）

(3) せぎととれ高の変化（せぎ工事前と工事後の米のとれ高を比較）

(4) 上筋新汐絵地図（坂本養川の生家所蔵寄託資料）

⑥ 映像資料提供ディスク（ＤＶＤによる映像、プリンターによる印刷資料の作成）

４．コーナーの活用と課題

坂本養川コーナーは、①小学校４年生の社会科の学習　②総合的な学習（学年を問わず積極的な活用が望まれる。基本的には先生方の素材研究の場であり、子どもたちへの学習資料提示の場でもある。）

授業の一環として訪れる場合は、学習の展開の中で・導入（課題把握）・課題追究・週末（まとめ）のうち、どの学習段階であるか、当日までに担任と学芸員が綿密な打ち合わせをしておくことが必要である。また、博物館側からの一方的な説明でなく、子どもたちの質問に答えてやれる場としたい。

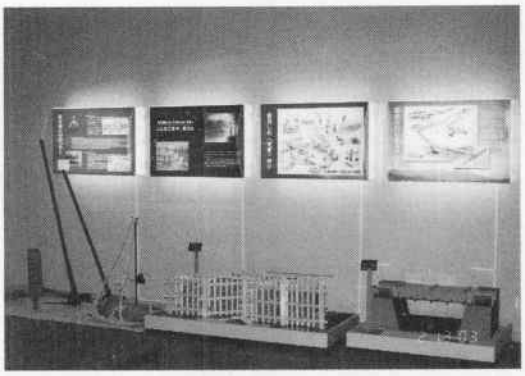
それには、養川の学習実践を通して、子どもたちが、何にこだわり、何を研究しようとしたのか、先生方と連携をとりそれらを把握しておくことが大事である。

しかし、子どもたちの学習に応えられる資料はまだまだ不足している。各地区の郷倉や各堰土地改良区に所蔵されている資料を、それぞれの関係者のご協力を得ながら収集していくことが大きな課題である。

また、子どもの学習だけでなく、養川の業績を諏訪地区の人々に知ってもらうにはどうすればよいかも課題である。

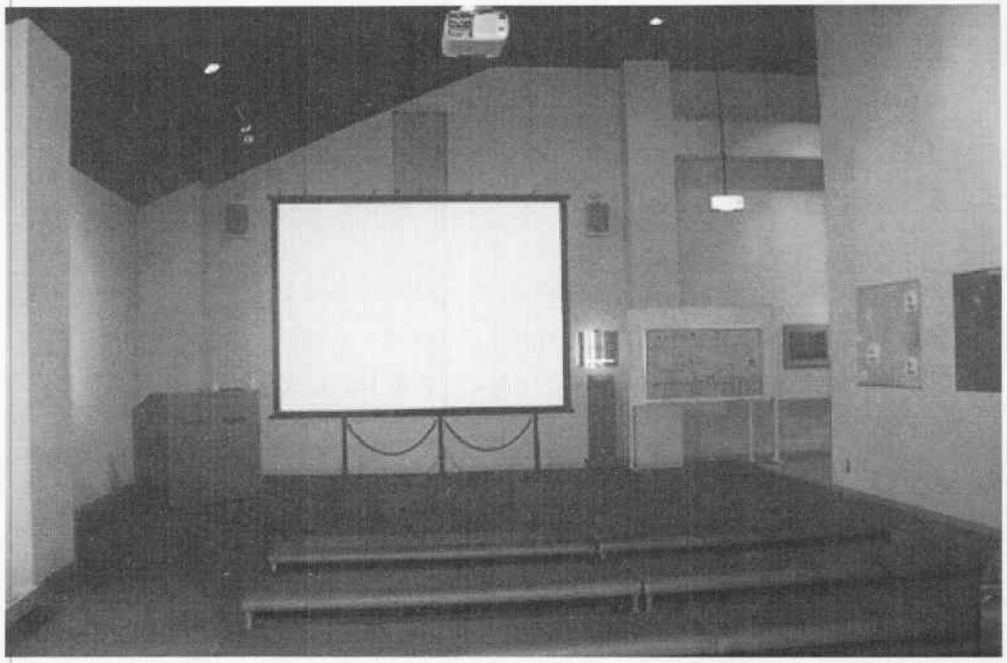
この坂本養川コーナーを設置するあたり、全体のご指導を郷土史研究家浅川清栄先生、映像、パネル、模型、図表の製作に心を込めていただいた㈱ＬＣＶ・㈱中央企画様、坂本養川翁像をご寄贈いただいた㈱ミハマ様 ほかご支援いただいた皆様に感謝申し上げます。

坂本養川コーナー



坂本養川の業績のパネルと模型

年表と汐地図

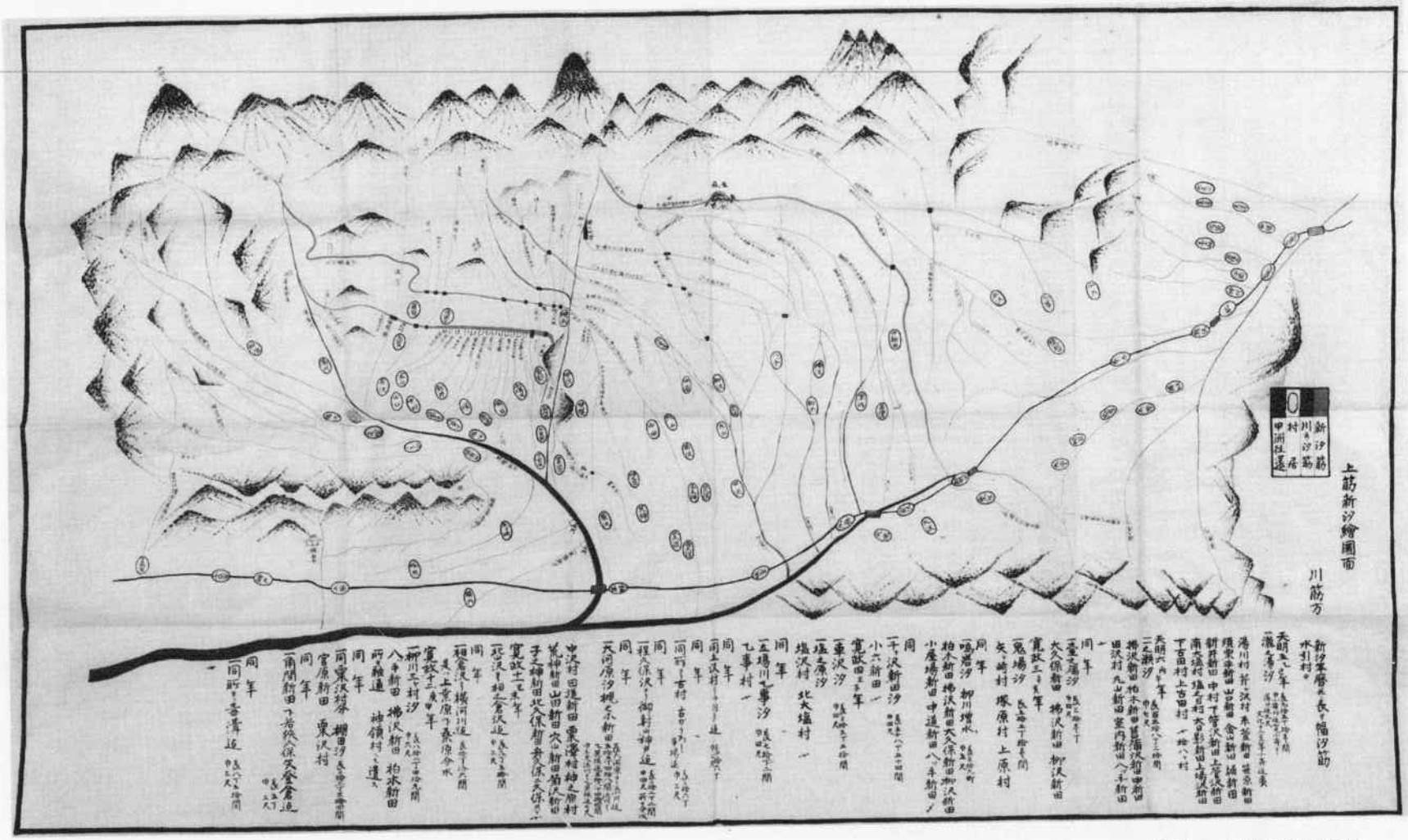


DVD映写スクリーン

諏訪の農業用水と坂本養川の年表

藩政関係　坂本養川の履歴　養川の対応と献策　農業用水関係　農業の基盤整備

年号	西暦	月日	事項
慶長13	1608	是年	立沢新田が開発される。
15	1610	1月	原山新田（中新田）が開発される。
元和 1	1615	5月	大坂夏の陣が終わり、元和偃武と呼ばれる、戦争のない時代が来た。
4	1618	是年	払沢新田が開発される。以後17世紀末までに、八ヶ岳山麓や各地の原野に、70余の新田が開発される。
寛永21	1644	3月	矢ヶ崎村惣検地が行われる。
貞享 2	1685	是年	柳川から田沢堰を引く。
宝永 2	1705	3月9日	芹ヶ沢村、風除を植樹する。
享保21	1736	3月15日	養川、田沢村に生まれる。幼名は太郎。
宝暦 5	1755	是年	養川、結婚する。
6	1756	是年	親切（新しい開墾）・畑直（畑を水田にすること）が禁止。
8	1758	是年	養川、田沢村名主になる。
12	1762	12月頃	養川、尾張（愛知県）・伊勢（三重県）・紀伊（和歌山県）・摂津（大阪府）・大和（奈良県）・山城（京都府）の旅に出る。
13	1763	8月	養川、江戸へ出るが、連れ戻される。
明和 1	1764	11月	田沢村、田村の新田（しんた）潰しを始める。
		暮れ	養川、田沢村名主を務める。翌年暮れまで。
		是年	家老千野貞亮（兵庫）ら三之丸派が新役所を設立、家老諏訪頼保（大助）等二之丸派との対立が始まる。
3	1766		養川、再び江戸へ出る。
8	1771	2月	柳川新堰の水論が起きる。
安永 2	1773	5月18日	養川、病んで江戸から通し駕籠で帰る。
3	1774	是年	養川、諏訪全群の水利の調査をする。
4	1775	12月	養川、堰の開削を献策する。（第１回）
6	1777	6月	養川、堰の開削を献策する。（第２回）
7	1778	7月	養川、堰の開削を献策する。（第３回）
8	1779	5月11日	養川、堰の開削を献策する。（第４回）
9	1780	2月 5日	養川、堰の開削を献策する。（第５回）
天明 3	1783	7月 3日	家老千野貞亮（兵庫）、家老諏訪頼保に切腹を命じ、二之丸派数十人を処罰し、二之丸騒動（御家騒動）が決着する。
		9月	養川、堰の開削を献策する。（第６回）
5	1785	10月17日	滝之湯堰が開削される。
6	1786	是年	一之瀬堰・坪之端堰・柳川新堰が開削される。
8	1788	6月 1日	養川、堰筋肝入になる。
寛政 3	1791	是年	鬼場新堰・千ヶ沢新堰（小六堰）が開削される。
4	1792	是年	車沢堰・塩之原堰・立場川乙事堰・程久保堰・大河原堰が開削される。
11	1799	是年	相之倉堰が開削される。
12	1800	是年	棚田堰・矢戸倉堰・高木堰が開削される。
享和 1	1801	7月13日	養川、小鷹匠格になり、坂本性を名乗る。
文化 1	1804	4月28日	養川、御引替願いを許され、隠居する。
6	1809	3月 1日	坂本養川、亡くなる。享年74歳。
大正 4	1915	11月	坂本養川、従五位を追贈される。



文化12年ころ 上筋新堰絵図面 蓼科・八ヶ岳の裾野から釜無川にかけて、養川が係わって開削した堰の絵図面。文化12年（1815）ころ作成したもの（茅野市八ヶ岳総合博物館所蔵）

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要11:7-14(2003)

昔の人びとの工夫
～改良された機織り機～

笠原郁子*

1．はじめに

博物館では『ロビー体験コーナー』において“はたおり”を行ってきたが、最近では“裂き織り”として、機織りがひそかなブームのように感じられる。今では裂き織りの風合いが好まれ、小学生からお年寄りまで、幅広い方が楽しんでいかれる。織る時は踏木を踏み、経糸が上下に開いている間に横糸を滑り込ませ、再び経糸を交差して織ってゆく、ごく単純な作業であり、集中力が必要だと思われる。機かけ八割、織り二割といわれるくらい作業工程の中では簡単で、織る作業は楽しいものである。

昔は、衣服は大変貴重なもので、ぼろぼろになって穴があいたとしてもさらに裂き、織り上げ、次のものに使用する、今でいうリサイクルを行っていた。“ボロ織り”といわれ、布としては厚く頑丈なため野良着としてもよく使われた。農閑期の女性の仕事として、はたおりは茅野市の女性達もむろん行ってきた。夏の間は忙しく作ることのできない衣服を冬のうちに作る仕事。今のように計算機を使って経糸の本数を計算していたというわけではなく、こうやるのだからおめえ（あなた）もこうしろ（しなさい）といった教え方で母から娘へ、孫へと伝えられていた。聞いた話では整経（経糸の長さをそろえる作業）のとき、小豆や大豆を利用して糸の本数を数えていた方もいるらしい。糸作り、はたおり、針仕事ができないと一人前の女性としてみてもらえず、「機織りができなければお嫁にいけないよ」とまで言われていたほど、若い女性にとっては大切なことであった。織った物を見せ合い、あれこれ言う社交の場としても機織りは一役かっていた。

当館所蔵のはたおり機は15台（地機を含まずに）、現在使用可能なものは10台ある。どれも同じような形であり、微妙に違う。今までは使えるものだから、微妙に形が違うとしか認識していなかったが、機織りについてよく知っている松沢かね先生に聞いたところ、それぞれ違うには何かあると教えてくれた。やはり織っている時も、それぞれ織り癖というものがあり、微妙な調整が必要となる。今回使用可能な10台あるうちの8台を採寸し、はたおり機にまつわることをまとめてみた。

2．はたおり機はどのくらい？

機織り機はどのくらいの大きさ（規格）なのでしょうか、５項目を採寸する。

①幅

＊八ヶ岳総合博物館学芸員

②奥行き

③布巻きの高さ

④山の高さ

⑤高さ

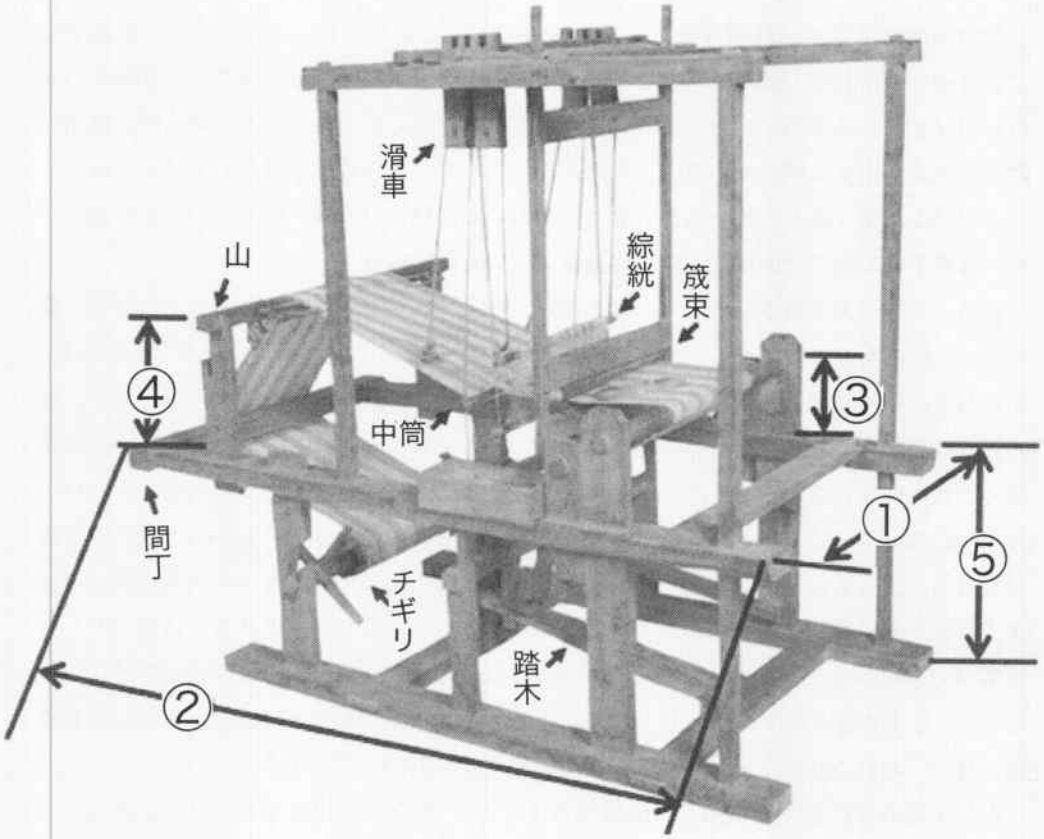


図1　各名称と採寸部

○資料

図2 A

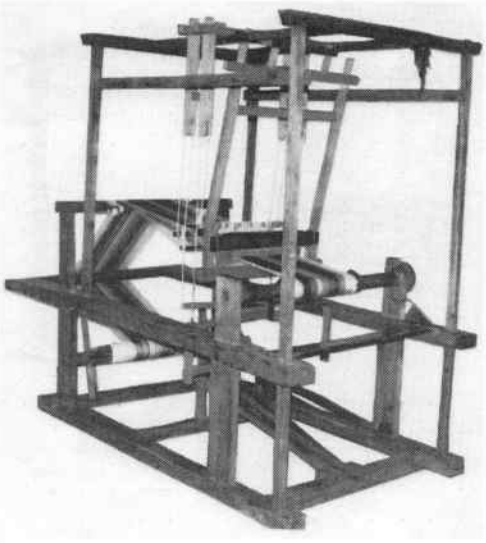


図3 B

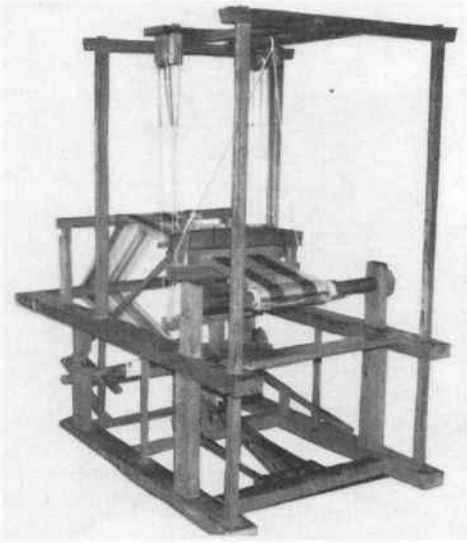


図4 C

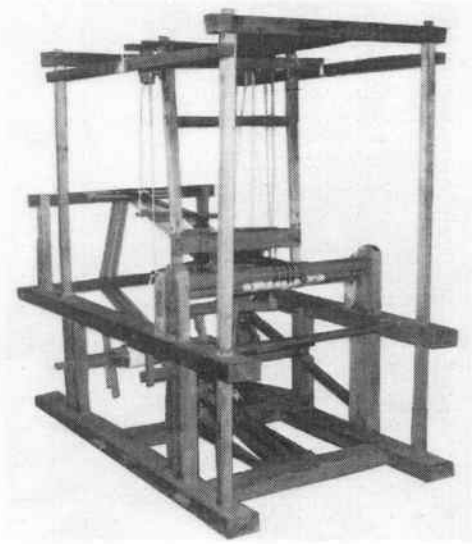


図5 D

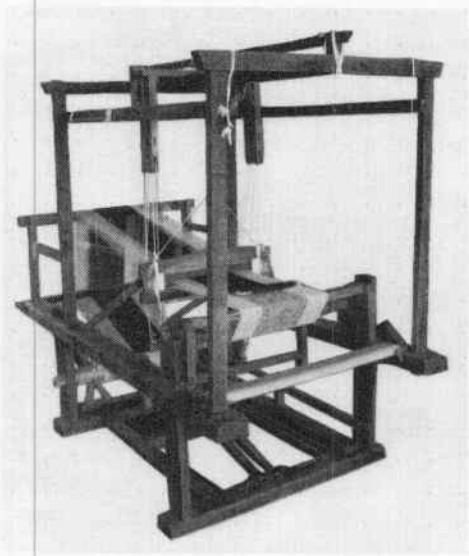


図6 E

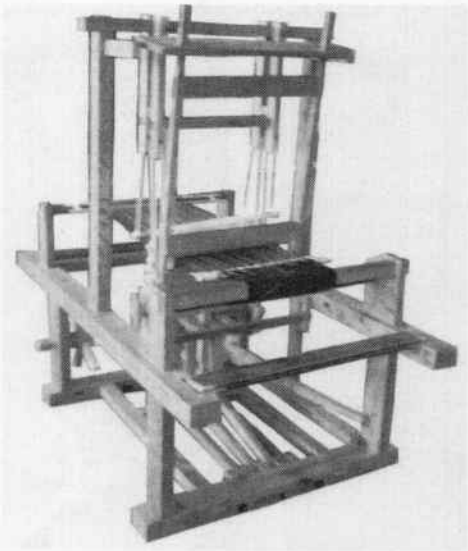


図7 F

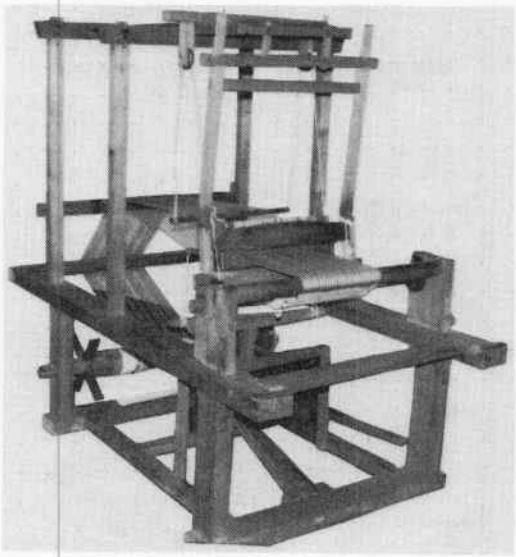


図8 G

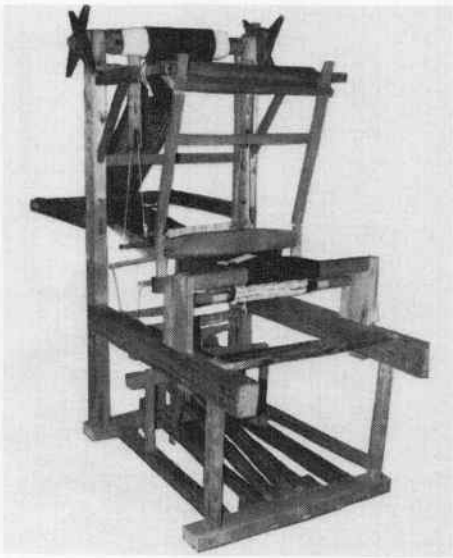


図9 H

○採寸結果

	A	B	C	D	E	F	G	H	平均	
滑車の数	2	2	2	2	2	1	1	1	A~E	F~H
① 幅	94	92	90	90	94	96.5	89.5	71.5	91.5	85.8
② 奥行き	193	184.5	175	186.5	168.5	181	170	173.5	184.8	174.8
③ 千巻の高さ	20.5	18	19	21	22	21	22	23	19.6	22.0
④ 山の高さ	41.5	37	36.5	42	26	42.5	29	−	39.3	35.8
⑤ 高さ	46.5	48	48	48	54	51.5	48	49	47.6	49.5
経糸の角度	9°	10°	10°	9°	2°	12°	4°	−	8°	8°

図10　各部採寸結果

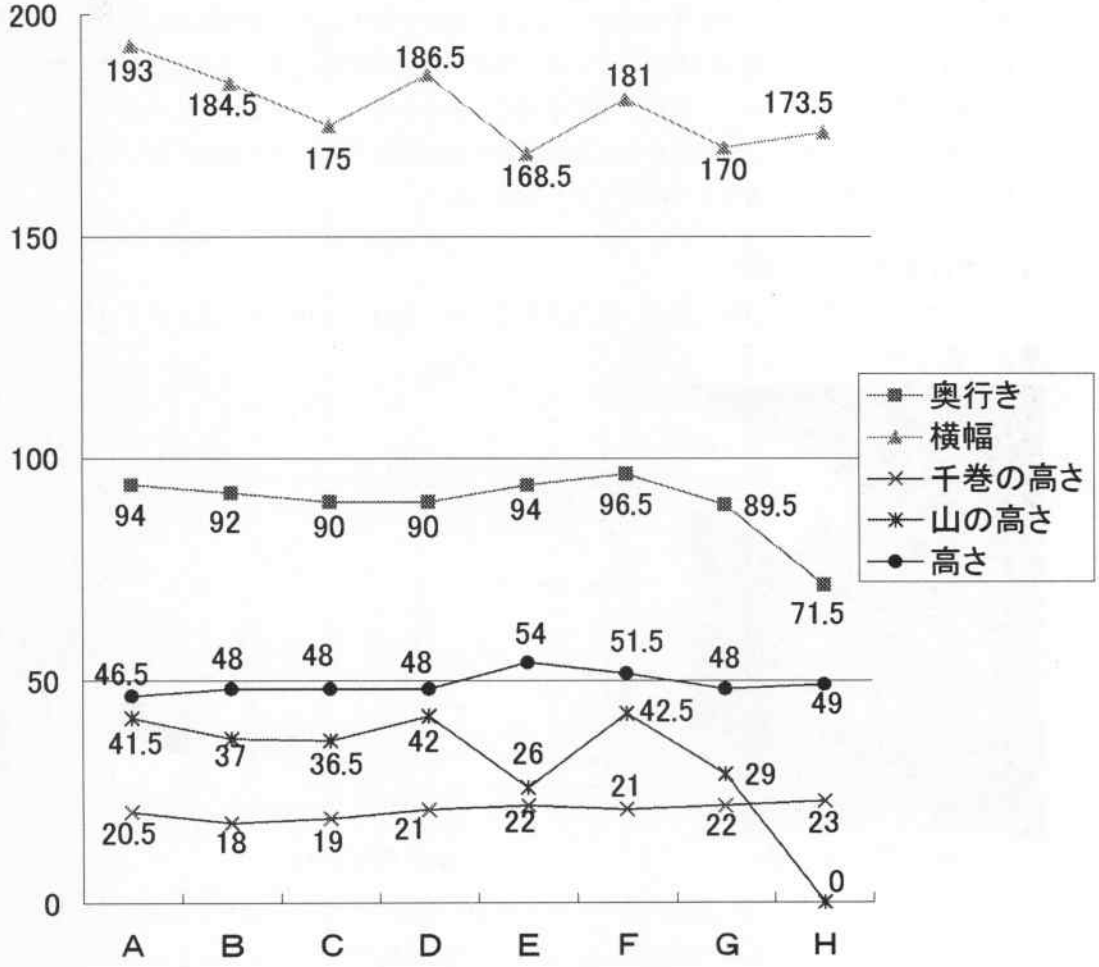


図11　採寸結果のグラフ

3．採寸結果を見て（考察）

・横から見た滑車の数の違いによって平均を分けて計算してみたが、滑車数２に比べると見た目にはさほど変わりないように感じるが、滑車数１の方が小さい事がわかる。

・①の幅について、約90㎝。その部分に使われている木材は平均で縦６㎝、横10㎝の角材が使われている。筬、筬束、筬引きなどがこの幅の中に含まれるとちょうどよい長さだと思われる。

・②の奥行きは180㎝が平均の長さである。これについては茅野市で使われていた機の規格かもしれないが、まだよくわかっていない。

・③の千巻の高さについては約20㎝。これは座ったときに腕を折り曲げ、作業するのにちょうど良い経糸の高さと考えられる。千巻の高さが大体同じなら、経糸の傾斜は④の山の高さによって決まる。その傾斜によっては筬の位置も決まってくる。

・⑤の高さについて、座ったとき足を曲げ、踏木を踏むのにちょうど良い高さと考える。

・Ｆに関しては完全に、他の形と違っている。チギリの位置が上についていることで、明らかに改造されたとわかる。最近の住宅事情でもあるように、コンパクト性を求められての改造だと思われる。チギリを上に置くことで山が省略されている構造となっているため、経糸の開き方が他のものに比べると微妙に違う。

4．改良されている部分

採寸していて、他に気づいた点や、改良されていると思われる点を次にまとめてみた。

●Ａの機について

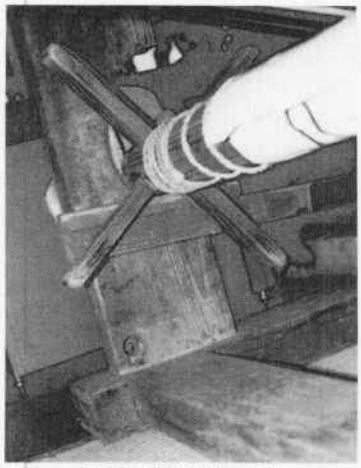


図12 筬引きの痕

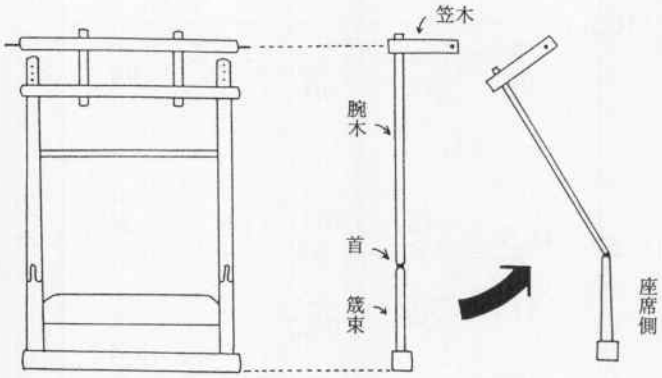


図13 筬束部分

・チギリの下に穴がある。これは筬引きがついていた痕と推測する。筬引きは横糸を筬で引き寄せる時、自動的に戻る仕組みのためついているものである。筬引きがついていると、パタンパタンと機を織るよい音が鳴る。筬が織物に当たった衝撃で横についている木が当り、音を鳴らしている。筬束を紐で吊るすのをやめ、腕木（横木）を取り付けたことによる改良痕である。

・山の部分は２段になっており、これもまた経糸の傾斜を変えることができる。

・滑車や筬束を乗せてある木には、笠木を入れるために幅を広げたと推測される穴が上部木枠に前後２箇所ずつある。笠木は厚い板で、手前に腕木を取り付け、後方だけ左右に太い釘を打ちケタに乗せる。筬束の重みで笠木は40度ほど傾斜になり、筬束の位置が決まる。打ち付けた後は元の位置に自動的に戻る仕掛けである。

●G・Hの機について

図14　Gの菊(内側)

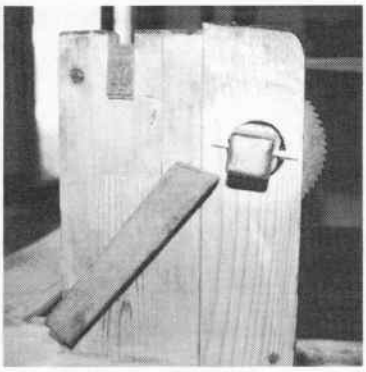


図15　Gの菊(外側)

図16　Hの菊

・図14と図15について、現在は内側に菊がついていますが、図14には留め木が残ったまま、菊が付いていたであろう痕があります。以前は図16の様になっていたと思われる。金属の菊になっていますが、以前は木による菊が付いていたと推測する。

・菊についていえば、菊はギザギザがたくさんあったほうが布を張るのに調整しやすいという。またその部品としては木製のものや金属製のものが見られ、留め木には竹なども使用されている。竹はしなるので、固定された形が多い。

・図17は山の部分ですが、2段階になっているのがよくわかる。ちなみに山の位置を変える仕組みになっているものはC・D・F・Gがある。経糸の傾斜を変えるためのものと考えられるが、どういう時行ったのかわからない。

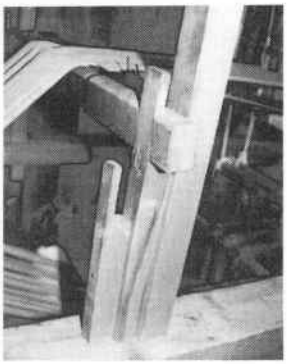


図17　山の部分 ▶

●Fの機について

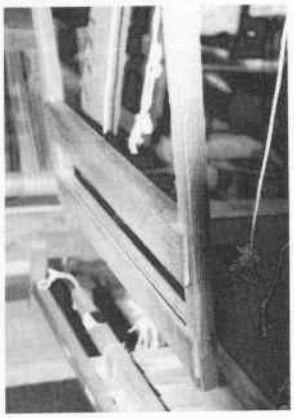


図18　筬束部分

筬束位置について、筬引きから腕木へと変わっているが、腕木もさらに改良されている。

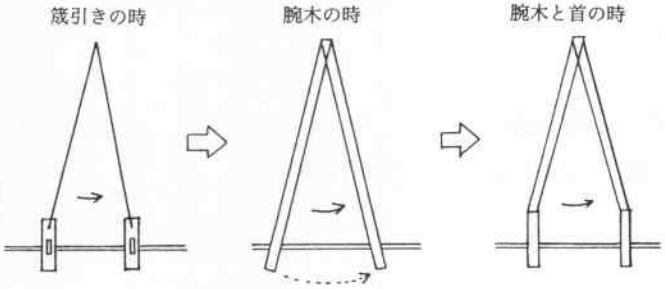


図19　筬束のあたり方

・腕木の部分を２つに分けることによって、今まで腕引いていたものが手首のスナップにより引くことができる。
・図19に筬引きによる打ち方と、腕木による打ち方の違いを描いてみた。厳密にいえばさほど織っている上では腕木の違いはあまり苦にならないようだが、改良する前の形として見ることができる。筬引きがついているときは自動的に戻りやすいが、いつも引っ張られている状態なので、引いたときに重い感じがする。腕木の方が使用したとき軽い感じがする。振り子のように戻るだけなので、さほど引っ張られる感じがしないためだと思われる。

5．昔の人々の工夫

昔の人々の生活に欠かせない、機織り機。機の形からいえば、原始機から始まり、地機、そしてより良い品物ができる高機へと機の形も変わってきた。そんな機織り機だが、それぞれの機の工夫はすばらしいものがある。

・筬引きを取り外したこと。 → 笠木と腕木が変わりにできた。
　それにより織物の織り幅が広がった。
・腕木へ首をつけたこと。 →作業中の腕への負担が減る。また、手首のスナップにより動かすことが可能になった。
・山の位置を高くした。 → 経糸が見やすくなり能率が上がった。
（これについては計測結果より平均８°の傾斜ができる）
・千巻を2つにしたこと。 → 織る位置が常に一定になることでより良い製品が作れる。
　（千巻が1つの場合は、布を織り、巻き取っていくとどうしても厚く、織り位置が多少ずれてしまう。）

6．終わりに

昔の人は布を大切にし、またその作業をする上での工夫がかなりあるのだとわかった。機織りに使用されている道具はまだ他にもいろいろな種類のものがあり、筬、糸枠、糸車、座繰など、博物館が所蔵する機織り関係の民俗資料はまだかなりある。それらの形も調べてみたいと思う。また、経糸の開口部についてなど、作業中での謎をといてみたいと考えている。機織りが生活の一部ともなると、工夫の仕方が半端ではないぞというほど、考えられているのだなと感心した。まだ書き加えられていない工夫点も多くあるが、今後の課題としたい。

7．参考文献

「織りへの誘い」　　松沢かね著

茅野市八ヶ岳総合博物館紀要11:15-22(2003)

「民衆のうた」として諏訪の地に花ひらいた俚謡の歩みについて

荻　原　儀　久*

1．はじめに

平成12年10月にオープンした八ヶ嶽岳麓文芸館も３年目を迎え、一歩一歩その骨格も明らかとなり、資料も豊かさを増してきたことは喜ばしい。

▼第一は、正岡子規・伊藤左千夫・島木赤彦・両角雉夫・森山汀川・篠原志都児原田泰人・松沢常毅等から現在の北沢敏郎先生門下へとつづく「アララギ」「ヒムロ」系短歌の系譜。

▼第二は、子規と時代を同じくして出発し、阿心庵晋永機の系統を継ぐ小平雪人と、子規・虚子門の高弟両角竹舟郎や飯田蛇骨・竜太系の俳人たち。

▼第三は、堀のぼるの「俚謡公論」「白樺」誌に集まった俚謡作家群。

▼第四は、東洋大学名誉教授 伊東一夫先生の生涯をかけて研究・蒐集された、文豪島崎藤村の貴重な遺品・研究資料である。

さらに、生涯学習都市の裾野の広がりを示す詩集・歌集・句集・随筆集・俚謡集も多数寄贈されて、まとまった展示会も持たれるようになった。

本稿では、今まで比較的知られることの少なかった俚謡について、その成り立ちから岳麓俚謡人の活躍について誌してみたい。

2．日本の伝統的な短詩型と俚謡

(1) **和歌**　5・7・5・7・7の三十一文字。(数え方　1首)

・漢詩に対する大和歌（やまとうた）として、和歌という。

・奈良時代に成立した万葉集の中には、長歌や施頭歌なども含まれ、三十一文字のものは短歌とも言われる。

(2) **俳句**　5・7・5の十七文字（数え方　1句）

・**連歌**（れんが）—平安時代から室町時代に流行した連歌は、短歌から派生したもの。短歌の5・7・5の上の句（長句）と、77の下の句（短句）とを交互に数人で詠み合い、二句で完了する。

句連歌（短連歌）と、発句・短句・長句と詠み連ねる鎖連歌（くさりれんか）とがあり、36句連ねる歌仙のほか、50句・100句（百韻）で完結するものが流行した。

o **俳諧**—純正な本格的連歌に対して、滑稽・機智を特色とする俳諧連歌が独自に成長し、江戸時代に庶民文芸として独立・発展した。広義には、俳句・連句・俳文・俳論などを含めた総評で「俳文学」の意。

o **俳句**—俳諧の連歌の発句（ほっく）を指し、明治20年代に正岡子規が新しい独立の

＊八ヶ嶽岳麓文芸館担当

詩形式として「俳句」の称を用いた。季語や切れ字をよみこむ伝統俳句に対し、口語・自由律・無季俳句などがある。Haikuとして今や世界的にブームをおこしている。

o **川柳**—５・７・５の十七文字（数え方　１句）

雑俳の一種。機知によって人情の機微をうがち、風刺と滑稽を主とする江戸庶民文芸。現代も時事川柳・会社せんりゅうなど盛況である。季語・切れ字を必要とせず口語・俗語をも用いる。俳諧の前句づけの付句が独立したもの。

o **俚謡**—７・７・７・５の二十六文字（数え方　１章）

民間に自然発生的に発展してきた俗謡・民謡・里唄。馬子唄・船頭唄などの労働歌・盆踊り唄・座敷唄などの民間で盛んにうたわれたはやり唄。最初の７音はさらに３・４、次の７音は４・３となだらかな小節を作って、うた全体の起伏をなめらかにしている。

３．俚謡の流れ

(1) 源　流

o 文字はなくても口から耳へ伝える唄が、原始社会にも労働・生活と共にあったであろう。

(2) **隆達節**（中世～近世初期）流行の小唄。歌詞は７・５・７・５のものが多い。
　——弄斉節（江戸初期）元和・寛永の頃（1615～44）遊里を中心に唄われた。

(3) **潮来節**（元、利根川の船頭歌。〝潮来出島のまこもの中であやめ咲くとはしおらしい〟）江戸中期頃から流行。
　—— o **都々逸**—天保末（1840～）頃から三味線歌、お座敷唄として流行。都々逸坊扇歌が曲節を大成。
　—— o **よしこの節**—江戸時代後期、江戸・名古屋・大阪～地方へと大流行。小唄・端唄・新内など。

(4) **御嶽節**
　—— **労働のうた**……馬子唄・追分・臼ひき唄・田植唄・漁師唄など。
　—— **盆 踊 う た**……木曽節・群上・はんや・おけさなど各地の民謡に発展。

(5) 黒岩涙香による「正調俚謡」運動

o 明治37年、全国紙「万朝報」により、従来の都々逸・よしこの等座敷唄の卑俗性を脱皮して〝日本古来の人情・風俗・自然の美をうたうべし〟と提唱した。

　涙香選により全国から毎日何千通の応募があり、万朝報俚謡壇から深沢吟扇・弘用知秋・中山士峰・飯島松涛・野村賤の家・楠草人など多くの俚謡作家が輩出した。

４．信州・諏訪における〝正調俚謡〟作家の活躍

(1) 万朝報の俚謡壇に盛んに投稿した先輩作家たち

o 吉沢可寛公	o 楜沢　若葉	o 清水二六史	o 小池　白羊
o 土屋　金麿	o 笠原　逸公	o 百瀬香遠流	o 八幡　麻胡
o 和佐田鈍刀	o 白鳥　秋声	o 堀内南霞園	o 山浦　一星

茨城・東京・愛知・岐阜・岡山・高知などと共に「**俚謡**王国長野」を形成し、昭和へと続く次の世代の作家を育てた。

(2) **全国俚謡作家十六人集「鬱金の風」**（昭和６年）

平林伸朗（上諏訪）・堀のぼる（茅野）ら信州作家掲載

(3) **下野幽波編「花野」俚謡四十六人集（昭和18年東京小春社刊）所載の郷土作家**

・平林伸朗（上諏訪―大正９年より万朝報俚謡壇投稿・郷土の狂音」「みず湖」湯の華吟社「俚謡公論」等で活躍）

・笠原逸公（諏訪豊田―大正６年頃から万朝報等で活躍）

・小池白洋（岡谷・下浜―大正８年頃より　　〃　　）

・宮坂孤松（上諏訪・東京―大正10年頃より　　〃　　）

・堀のぼる（茅野・宮川―昭和２年信陽俚謡壇「俚謡公論」・俚謡十六人集**「鬱金の風」**同人として活躍）

・金子　小波（諏訪・湖南―明治21年生れ。大正初期より活躍）

・柳沢　多門（茅野・北山―大正末より吉沢可寛公に就く。「俚謡公論」同人）

・山浦　俊陽（小県・滋野―大正初期から活躍）

・清水二六史（　〃　　〃　―明治39年から活躍）

・百瀬香遠流（上諏訪―大正５年頃から活躍）

・橋本　梢波（埴科・清野―大正８年頃から、下野幽波先生師事）

(4) **「明治・大正・昭和 全日本民謡作家百人集」**

（昭和44年全日本民謡作家連盟つくばね会編）

・平林　伸朗（上諏訪・松本）　　清水　剣人（更級上山田）

・塩野崎卷浪（岡谷・長地）　　堀　のぼる（茅野・宮川）

・林　　待人（岡谷・本町）

(5) **諏訪作詩協会「白樺」誌同人**（昭和48年度）

〈同人〉池上　明月　　堀　のぼる　　藤森　常香　　白鳥さとる　　塩野崎卷浪
藤森　一二　　林　　光春　　林　　待人　　安藤　酔花　　中村　　琳
高木伊勢子　　小池　紫峰　　中田　楚水　　高木　　清　　海沼　竜柱
一ノ瀬清子　　牛山　詩水　　柳沢　多門　　北原みゆき　　岩本　夏風
塩野崎きみ子

〈顧問〉堀　ただ夫　　藤森よしと　　藤森　一郎　　五味　天外　　堀　とし路
小尾　俎杖　　宮坂　一眠

〈客員〉清水　剣人　　塚田すすき　　都築　白樺　　山浦　一星　　小池　蛙声
窪田　白村　　平林　伸朗　　石塚　蛙城　　都築まこと　　菊池星外史
牛山　忠雄　　金子　嘉雪

〈編集〉塩野崎卷浪　　林　　光春　　小池　紫峰　　堀　のぼる

(6) **現代長野県民謡作家21人集「分水嶺」**（昭和51年白樺社刊）

・池上　明月（宮川丸山）・一ノ瀬清子（辰野）・石塚　蛙城（小諸）

・林　　光春（下諏訪）・林　　待人（岡谷）・堀　とし路（茅野宮川）

・堀　のぼる（茅野宮川）・海沼　竜桂（岡谷）・田村ちゑ子（豊平）
・都築　白樺（小諸）・塚田すすき（岡谷）・中村不夜城（下諏訪）
・牛山　忠雄（玉川山田）・山浦　一星（小県東部町）・柳沢　多門（北山湯川）
・藤森　一二（宮川田沢）・塩野崎巻浪（岡谷長地）・清水　剣人（上山田）
・平林　伸朗（上諏訪）・鈴木まさる（戸倉町）

(7) **現代日本流民謡作家二十人集「菊日和」**（昭和51年　白樺社）
・五味　吐月（宮川両久保）・高木伊勢子（下諏訪）・田村ちゑ子（豊平）
・一ノ瀬清子（辰野町）

5．諏訪地方における民謡の源流

(1) 山浦（茅野市東部・原村・富士見方面）の祭り歌・盆踊唄

・矢ヶ崎部落のぎおん祭（７月15日）～八月のお盆にかけて各村々の辻・お寺の庭・神社前の広場で踊りの輪が広がる。
・酒室神社の上り祭り（８月26日宮川坂室）
・原山祭り（8月27日御射山原）
・下り祭り（原村払沢・八ッ手など）
・十月の十五夜祭など夜を徹して若者たちが近郷近在から集まって踊り明かした。

▼祭り唄・盆踊り唄・郷土色ゆたかな俚謡

〽盆もおえたし原山様も／待ちるお十五夜まだ遠い
・明日の晩くる前約束に／置いてゆかんせ煙草入れ
・遠いところを来てくれた／踊りゃ終えても帰しゃせぬ
・たとえ世辞でも捨言葉でも／今の言葉を忘りゃせぬ
・主さ川上私しゃ川下よ／書いてお流し思うこと
・蚕上がれば親湯か渋へ／連れてゆくから辛抱しな
・私しの心と永明寺山は／他にゃ気（木）はない松ばかり
・木曽じゃ御岳甲州じゃ御岳（みたけ）／諏訪じゃ蓼科八ヶ岳
・諏訪の湖水を鏡となして／お化粧するのが富士の山
・諏訪の名物寒天生糸／そして鋸種蚕

(2) 諏訪地方の代表民謡としてのエーヨー節と天屋節

▼エーヨー節

〈起源〉 元禄時代から唄われていたという説と、糸とり唄として明治に入って製糸が盛んになった頃うたい出されたという説がある。

〈代表的なエーヨー節〉

〽諏訪の平らによしなら二本／思い切るよし切らぬよし
・来たら寄っとくれよ破（あば）ら家だけど／ぬるいお茶でも熱くする
・私しゃ十三糸とり娘／糸は細らで身が細る

・糸は切れ役わしゃつなぎ役／そばの検番おこり役

・諏訪の湯の町出てくる時は／一度見返り二度戻る

▼天屋節

〈起源〉製糸とならんで、天保時代より発祥して明治・大正をピークに信州寒天の中心の諏訪で、伊那・水内・佐久・甲州からの出稼ぎの人たちの労働歌として盛んに唄われた。

〈代表的な天屋節〉

▼東蓼科西晴ヶ峰／中の茅野町天屋節

・雫下十五度凍てつく寒さ／唄が聞こゆる天屋節

・寒い風だよ信州の風は／じわりじわりと身にしみる

・天屋若衆に惚れるな女子（おなご）／花の三月ア泣き別れ

6．諏訪俚謡作家協会による正調俚謡の発展

(1) 堀のぼる（明治43 1910-平成８ 1996）氏の回想

▼大正～昭和初期

・信陽新聞俚謡欄に投稿

諏訪地方の指導者―吉沢可寛公・小池白羊・百瀬かをる・笠原逸公等。

諏訪地方の俚謡子百名近く、毎月のように上諏訪・下諏訪・茅野で例会。太平洋戦争が激しくなる頃より衰退。

▼指導者としての歩み

・昭和６年、万朝報主催の全国俚謡大会に初参加

・昭和８年～月刊「俚謡公論」発行100号まで

・昭和11年信陽新聞俚謡選者

・昭和38年～俚謡誌「白樺」発行

・昭和54年～南信日々新聞俚謡選者、公民館俚謡講座講師

・昭和58年「俚謡入門」「民衆のうた考」

・平成４年俚謡集「万年青」平成10年「りんごの花びら」（遺稿集）

(2) 俚謡誌「白樺」による主張・啓蒙活動

▼民謡とは、その土地土地に伝わるさとうたであり、俚謡である。俚謡は、生きとし生けるもののふるさとである。喜びにつけ、悲しみにつけ、こよなく愛され、口ずさまれて古来より伝わった民衆のうたである。（「民衆のうた考」）

▼俚謡は民謡である。

民謡は俚謡である。

理屈や理論でなく、民衆の「うた」である。

古きを尋ねて新しきを知る。時代と共に生きる民衆の二十六文字でもある。

文字を見て判ずるものは「うた」ではない。唄う「うた」として耳で聞き、口に伝えて其の意が通ずるものこそ民謡である。

人情・風俗・情緒を詠じ、あるときは時代を諷刺し、またあるいは諧謔を詠じ、風物歴史をひもとき、時代と共に森羅万象を口から耳へ伝える大衆歌である。

▼木にも石にも情をこめて／艶を出しゃこそうたになる。

正調庵黒岩涙香は手引草の中でこう教えている。情と艶によって「うた」の真髄をつらぬくことは最も大切なことである。情愛織りなす人間社会は、物質本位に偏り、トゲトゲしく、心のなごみを社会から奪おうとしている。

私たち俚謡子は、すべてに情をこめて大らかであり、すべてに艶を出し、平和でありたい。仲間の輪を広げ、お互いに尊重し合いながら。

・遊びましょうぞえ小唄の園に／睦みむつみて末永く

▼よりよき　前進／よりよき　進歩。
よりよく　大衆の真理をつかみ、／よりよく　作風をもとめ
より多くの　新人を探し、／より多くの同好の士を集め
この道に　貢献しよう。

日本民族とふるさとの中から、自然発生的に生まれ、多くの人に愛唱され、民衆の中に定着した民謡。民謡こそ生きとし生けるもののふるさとである。

▼うたは考えた揚句に必ずしも傑作が出るとは限らない。仕事中でも、五分間のひと休みの中でも生まれるものである。／心に常に作謡心をもつことである。／撓まざる努力こそ佳作である。

▼選手は撓まざる努力によって記録が生まれる。名工の傑作また然り。すべてが、またこの意に通ずる。特に俚謡は、森羅万象を捉え、天然の美、社会の美、人間の美獣類の美、性の美、悲喜の美、情愛の美、労働の美等々、俗に流れず、隈に溺れず誇張を避け。嘘偽に偏せず、ありのままを素顔美にたえず詠い上げる。その結晶が後世に残るであろう。

▼俚謡は、私たちの生活の記録である。／生活の必要から、生活のたのしみから生まれてくる。／生活の様式の変化により、世代の変化により、作詠の流れが変化してゆく。日常生活の哀歓と、四季の変化をうたいあげる短文芸である。

▼いつでもペンを持っていた。いつでも本を広げていた。日本俚謡協会長として、東奔西走の中で書いたり、読んだりの量は相当のものであったように思います。(平成10年遺稿集「りんごの花びら」堀のぼる作品集―令息堀晃氏あとがきより)

▼今日、81歳を迎えました。俚謡を始めてから67年、これといって後世に残るうたのないことは慚愧にたえない次第であるが、うたは私の歴史であり、私の生活記録であります。四季折々に詠み、あるいは時事を詠じ、社会を諷刺し…。60余年間の作謡約４万章。このうちメモ帳を紛失したりして、残った２万章の中から既刊本掲載のものは大体除いて「万年青」に年代順に自選して載せたのが1,200章です。

俚謡は自分の趣味であり、喜怒哀楽をのり越えた心の糧と思います。雅友と余り優劣

を競うものでもなく「生涯学習」の一片として楽しく勉強しています。人生の一日一日、一年一年の生活の記録でもあり、二十年、三十年と自分の足跡をふり返って、うたで世の移り変わりを思い起こし、これはあの時「わかくさ」・「俚謡春秋」「つくばね」「南風」時代のまた、全国俚謡大会岐阜大会の作などと思いを巡らし楽しんでいます。

（堀のぼる著「万年青」平成４年あとがき）

(3) **堀のぼるの作品から**

・君に逢うまで顔見るまでは／何故か淋しい星祭り（大正15）
・俺（おら）の山一労働争議／負けて逃げ込む母の家（昭２）
・オリンピック日の丸上げた／日本選手の織田 鶴田（昭３）
・嫁に来ないか都会を捨てて／栗もりんごも実る里（昭４）
・六十余州の糸娘が踊る／盆にゃ岡谷へ参らんせ（昭５）
・我に返れば流浪の五年／故郷にゃ二親（ふた）あった筈（はず）（昭６）
・倅二十五マルクス主義よ／理屈ばかりで田は打たぬ（昭７）
・ジャズもダンスも知らない田舎／昔ながらの盆踊り（昭７）
・男泣きした冷たい言葉／それが男にしてくれた（昭８）
・これが日本の光りと陰を／分ける軍部の雪の朝（二・二六事件）
・屠所に曳かれる羊のように／物を言わない列が行く（昭20 シベリア抑留）
・勝つと思ったああそれなのに／つんぼ桟敷の民の草（昭20）
・俚謡は作れど投吟先も／なくて空々漠々と（昭26）
・若い者には一歩をおいて／老いは静かに茶をすする（昭61）
・悔は残さぬ八十余年／ぽっくり往生したいもの（平成３）

(4) **個人の俚謡集から**

▼**「黄楊の樹」**堀とし路（茅野・宮川）昭和56年
茅野プリント白樺社刊

・添え乳はなせば無心の笑顔／愛のうちわで風を生む
・今朝の朝顔数える坊の／指が足りない花の数
・いっそ渡ろか情けの橋を／よしや男はすたるとも
・生きる強さよ枯野の中に／赤い野茨の実が残る
・手引草から拾ふた種を／作り育てて五十年

▼**「雪割草」**小平弘達（茅野・豊平）平成11年 長野日報社より

・俚謡（うた）を学んで豊かな心／角がとれたと笑う妻
・昔なつかし炭焼く山は／今じゃゲレンデ雪煙
・配る新聞待つ人あって／老いの張り合い雪の朝
・山は天国浮世を忘れ／客の世話した峰の小屋
・子等に頼りにされなくなって／心わびしく老いを知る
・明けた初春金婚喜寿と／目出度かさねた鏡餅

▼「二輪草」竹内清・千恵子夫婦（茅野・湖東）平成12年　長野日報社刊

＊竹内清集から

・酸いも甘いも知り尽くしての／愛は夫婦のさじ加減

・言葉一つが支えになって／愛の手を貸すボランティア

・自分一人の暮らしじゃないと／老いて気のつく昨日今日

・あれやこれやとこまめの母が／あって我が家に灯がともる

＊竹内千恵子集から

・お国訛りがとびだす会話／席もにぎわう謡開き

・家族総出で腰びくつけて／田植した目を懐かしむ

・無理な事だと承知の上で／孫にゃついつい甘くなり

・澄んだ名月ベッドの母に／合わせ鏡で見せてやり

7．まとめ

「民衆のうた」として、日本各地方に自然発生的に生みだされ、長い間、ある時は労働の歌として、また盆唄や祭りの唄、あるいは座敷唄として伝承されてきたフォーク・ソングとしての俚謡の歩みにふれてみた。

そして、明治37年に、子規の俳句・短歌革新運動に呼応するようにして起こった、黒岩涙香による「正調俚謡」革新運動により、その後文芸としての創作俚謡が大正～昭和10年代隆盛を極めるようになった。残念なことには、戦争と、敗戦後あわただしくゆとりのない生活が続いて、かつての栄光の時代はなかなか甦らない。

そうした中にあって、堀のぼる主宰の俚謡誌「白樺」が1964年～1995年熱心な愛好者を多数育てまた、公民館の俚謡講座等により地域に愛好グループが育ちつつあることは喜ばしい。最大のグループとして茅野市俚謡作家協会が月例会をもち活溌に活動しているが、これからの課題として若い同人を加えて更に鮮度を上げた創作を進めたいとしている。

8．参考文献

堀のぼる「俚謡入門」1978　茅野プリント

〃　「民衆のうた考」1983　白樺社

小池安右衛門・小口伊乙「諏訪北山民謡集」1982　岡谷書店

下野幽波「花野・俚謡四十六人集」1969　つくばね会

堀のぼる「分水嶺・現代長野県民謡作家二十一人集」信濃路

〃　「菊日和・現代日本女性民謡作家二十人集」白樺社

〃　俚謡誌「白樺」（1964～1995）120号　白樺社

金田一春彦他「日本語大事典」1989　講談社

新村出「広辞苑」第３版1988　岩波書店

平成14年度茅野市八ヶ岳総合博物館事業報告

1．常設展示　入館者　13,224人

2．展示替え　未来コーナーから坂本養川コーナーへ

せぎの模型、写真パネル、シアター（DVD盤映像）

3．企 画 展

①写真展「冬のおくりもの」7/27-9/1　日本写真家協会会員　西村　豊

氷、雪、霜の自然造形の不思議な世界

オープニングトーク　7月27日（土）『西村　豊』52人

ギャラリートーク　8月17日（土）『西村　豊』40人

②収蔵品展『八ヶ岳の動物たち』11/23-1/19

博物館に収蔵されている動物の剥製を展示、動物の生活跡、分布図等を紹介

・ジオラマ探鳥会　11月30日　講師『両角英晴』14人

③研究・創意工夫展　10月19日から11月17日

市内小中学校13校生徒の工作、絵画、研究作品の展示

出品数 223点

○工作・絵画部門

茅野市長賞	塩澤　寛治（米沢小３）	牛乳キャップの米沢小学校
教育委員会賞	酒井　峻佑（永明小５）	夏休みの思い出
博物館賞	安原　綾乃（玉川小１）	もりのふくろう
審査員特別賞	伊藤　岳広（宮川小６）	いす

○研究部門

茅野市長賞	柳平　真菜（豊平小２）	かんばざわのやさいしらべ
教育委員会賞	百瀬　友博（東部中２）	スターリングエンジンを作ろう
博物館長賞	星野　佑（豊平小３）	ぼくん家の鳥図かん
審査員特別賞	牛山　苑恵（金沢小３）	シジュウカラのかんさつ

4．文芸館展示替え

原田　泰人（泰）19点　　飯山　鶴雄（けさゑ）１点

北沢　敏郎　23点　　松沢　志乃　５点　　伊東　一夫　１点

5．ふるさと講座

①坂本養川汐を訪ねて　６月２日（日）講師　関　雅一　参加者15名

②文学碑めぐり　６月23日（日）講師　原　充　参加者21名

③北横岳観察会　　7月28日（日）講師　白鳥　保美　　参加者23名
④郷土料理（くず粉）　10月14日（日）講師　博物館職員　　参加者６名
⑤天草からところてん　1月26日（日）講師　博物館職員　　参加者５名
（寒天工場見学中止）

６．博物館活用指定学級　26学級　723名

６月25日　永明小学校　６年１組　33名
『土器作り』　講師：功刀　司（考古館学芸員）
６月27日　永明小学校　６年２組　33名
『土器作り』　講師：功刀　司（考古館学芸員）
７月３日　米沢小学校　２学年　44名
『紙すき』　講師：正木　美香（博物館学芸員）
７月４日　北山小学校　６学年　44名
『土器作り』　講師：功刀　司（考古館学芸員）
７月10日　永明小学校　６年３組　33名
『土器作り』　講師：功刀　司（考古館学芸員）
７月11日　金沢小学校　２学年　18名
『紙すき』　講師：正木　美香（博物館学芸員）
10月30日　北山小学校　２年１組　36名
『豆腐作り』　講師：正木　美香（博物館学芸員）
10月31日　豊平小学校　２年１組　36名
『豆腐作り』　講師：正木　美香（博物館学芸員）
11月１日　泉野小学校　２学年　26名
『豆腐作り』　講師：正木　美香（博物館学芸員）
11月26日　湖東小学校　２年１組　25名
『豆腐作り』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）
11月27日　湖東小学校　２年２組　25名
『豆腐作り』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）
11月28日　玉川小学校　２年２組　32名
『豆腐作り』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）
11月29日　玉川小学校　２年３組　32名
『豆腐作り』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）
12月４日　玉川小学校　２年４組　33名
『豆腐作り』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

12月５日　玉川小学校　　２年１組　　33名

『豆腐作り』　　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

12月６日　金沢小学校　　２・３学年　46名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

１月16日　宮川小学校　　３年２組　　31名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

１月17日　米沢小学校　　３学年　　45名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

１月22日　宮川小学校　　３年３組　　31名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

１月23日　宮川小学校　　３年１組　　31名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

１月24日　豊平小学校　　３学年　　41名

『天草からところてん』　講師：笠原　郁子（博物館学芸員）

２月13日　金沢小学校　　６学年　　15名

「まが玉」　　講師：竹村　　哲（考古館職員）

７．博物館小講演会

①坂本養川を知ろう

６月１日　　講師：関　　雅一（永明小教諭）　　参加者17名

②八ヶ岳の動物たち

１月11日　　講師：両角　源美（茅野市教育長）　参加者54名

③諏訪湖の水平虹

２月11日　　講師：藤森　宏一（岡谷小教諭）　　参加者21名

８．古文書解読事業　　講師：細田　貴助（博物館専門委員）

①古文書相談会　　６回延べ　18名

②古文書解読講座　１月25日から２月16日　８回　　参加者34名

９．観望会

北部生涯学習センターにて毎月実施　講師：大谷　勝己（尖石縄文考古館）

６回実施（３回中止）　参加者　103名

２月７日　天文講演会『自然を観察する新しい目』

講師：志岐　成友（理化学研究所）　参加者34名

10.　ロビー体験コーナー

４月から毎月第１土、日曜日に『機織』、第３土、日曜日に『作って遊ぼう』のコーナーを設定している。

・機織　　参加者　130名

・作って遊ぼう　　参加者　147名（竹とんぼ、ブーメラン、組み木、小鳥の巣箱作り、ビー玉ゲーム）

①６月15, 22, 29日　歌会始め　講師：丸茂　伊一　北沢平八郎　14名

②９月7, 14, 21, 28日　拓本・表装　講師：篠原　敬博　７名

10月5, 12日

③11月16日　つる細工　講師：篠原伊津子　14名

④12月21日　綿羊づくり　講師：笠原　郁子　12名

⑤12月22日　しめ飾り作り講師：平沢　忠由　矢崎栄一郎　18名

⑥１月18日　藁ぞうり作り講師：渡辺　正晴　10名

⑦ロビー体験発表会　３月８日から４月13日

11. 博物館ボランティア活動

・展示解説講習会　５月25, 26日

・探鳥会　４月20日　運動公園周辺

５月３日　竜神池周辺

12月15日　守矢史料館周辺

２月22日　諏訪湖周辺

・天文友の会　天文望遠鏡の取り扱いと星空観測

・機織（ねじばな）

・山浦の語りべ

・茅野市子ども科学クラブ

12. その他

o 博物館協議会

o 協議会視察研修（豊田市美術館、トヨタ自動車博物館、豊橋市自然史博物館）

o 博物館専門委員会

o 博物館、文化財課だより『八ヶ岳通信』第21号発行

o 博物館学習会員　319名

博物館協議会委員名簿

＜平成14年度＞

丸　茂　一　市
小　平　昌　寿
飯　田　美智子
長　田　豊　彦
小　平　邦　雄
土　橋　正　子
井　原　栄　子
篠　原　敬　博
湯田坂　正　一
今　井　文　明
原　　洋　司

八ヶ岳総合博物館専門委員名簿

＜平成14年度＞

自　然（動物）下　山　良　平
自　然（陸水）浜　　篤
自　然（天文）今　井　文　明
自　然（天文）畑　　英　利
人　文（歴史）細　田　貴　助
人　文（民俗）牛　山　市　弥
人　文（歴史）中　村　　昭
人　文（民俗）牛　山　圭　吾
人　文（文芸）伊　東　一　夫
人　文（文芸）北　澤　敏　郎
人　文（文芸）篠　原　圓　平
人　文（文芸）原　　充
人　文（文芸）北　澤　平八郎

※※※ 博物館職員名簿 ※※※

＜平成14年度＞

館長	小池春夫	(嘱託)
係長	五味正幸	
主任	大谷勝己	(観望会担当・尖石縄文考古館兼務)
主任（学芸員）	正木美香	(神長官守矢史料館兼務)
主事（学芸員）	笠原郁子	
臨時職員	荻原儀久	(文芸館担当)
臨時職員	小堀幸恵	
臨時職員	北澤千登勢	(11月より)
臨時職員	長田ひろ子	
施設管理	牛山克也	東急コミュニティー

紀　要　第 11 号　　2003年3月31日

編集発行　茅野市八ヶ岳総合博物館
〒391-0213 長野県茅野市豊平6983番地
TEL 0266 (73) 0300
FAX 0266 (72) 6119